

<エッセイ>「苦蟲から恵比須顔に」：本多静六の 一般社会へのまなざし

著者	岡本 貴久子
雑誌名	日文研
巻	57
ページ	2-8
発行年	2016-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006491

<エッセイ>「苦蟲から恵比須顔に」：本多静六の 一般社会へのまなざし

著者	岡本 貴久子
雑誌名	日文研
巻	57
ページ	2-8
発行年	2016-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00006491

エッセイ

「苦蟲から恵比寿顔に」——本多静六の一般社会へのまなざし——

岡本 貴久子

今年三月末、博士論文をもとに日文研叢書『記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績』を出版する機会に恵まれた。その主役・本多静六について、本文に書ききれなかったエピソードを綴ってみたいと思う。

『人生と財産』

『人生と財産』という化粧箱入りの真っ赤な大著が私の手元にある。送って下さったのは、本多の嫡孫の東京大学名誉教授、故・本多健一先生の奥様である。丁重なる御手紙とともに、ずしりと重いその本はこの四月から私の書棚に納まった。博士論文を執筆するにあたり、本多の専門分野に係る林学・造園関係の資料には限無くあつたが、成功の秘訣といった所謂一般向け「ビジネス書」には手が回らず、今回あらためてページをめくることとなった。

本多健一先生は、ご専門は化学技術、特に光エネルギーの開発に力を尽くされた研究が知られており、東京大学工学部教授を定年ご退官されたあと、紫綬褒章（一九八九）や日本学士院

賞（一九九二）、勲三等旭日中褒章（一九九五）、文化功労者（一九九七）、日本国際賞（二〇〇四）等の数々を表彰された高名な学者である。一九八三年から八九年の間には京都大学でも教鞭を執られた。一九五七年にパリ大学で Ph.D.（理学）を取得された先生は、一九七九年にフランスから Chevalier l'Ordre des Palmes Academiques の称号を贈られている。仏留学の時期を等しくされる平川祐弘先生は、本多先生とペアでピンポン大会に出場した愉快な思い出を記しておられる（『書物の声 歴史の声』二〇〇九年）。お生まれは大正一四年で、数年前にご逝去された。残念ながら生前の本多健一先生にお目にかかることはなかった。

本多静六の『人生と財産』は、一九五〇年に実業之日本社から発売された「私の財産告白」や「私の生活流儀」を再編集したもので、奥付をみると二〇〇〇年に初版発行、二〇〇三年一月に一〇版発行となっている。出版元は日本経営合理化協会出版局というところで、中身は本多健一先生が監修されたようだ。

『人生と財産』は厚さ約三・五センチの A 五判で、拙書『記念植樹と日本近代』と並べてもほぼ変わらないが、ページ数でいうならば本多の方は本文四〇六ページ、拙書五四三ページで百ページほどの違いだが、大きく異なっているのが紙質と文字の大きさである。本多の方は厚みのある書籍用紙に、フォントが一二ポイントと大きく、漢字表記もひかえめ、行間にもゆとりがあって見やすく、ひとめで一般の読者を対象にした書籍であることがわかる。一方、私の本は九ポイントの文字に紙質は薄め、漢字も多い。博論の予備審査から本審査、そして書籍化の段階で（不本意ながら）本文をかなり削り、註も二段組みにするなど工夫を凝らしたが、それでもまだ分厚い。なかなか通読するのが大変で……というご感想、というか、お叱りの言葉をしばしば頂戴する。拙書は専門書に分類されているが、誰を読者として対象にしているかとい

うことは、こういうところにも現れる。本多健一先生が監修された本は、現代社会に本多静六という人物をわかりやすく紹介するために採られた手法であり、祖父の姿をそばで見ているらしい本多先生ならではの本づくりといえる。

本多静六と読者層

生前の本多静六、謂わば戦前の本多は大衆社会と広くつながっていた。造林学者かつ造園学者として研究と教育に従事する傍で、新聞・雑誌を通して一般の男性や婦人、子ども向けに読みやすい文章を数多く残している。『實業之日本』から『文藝春秋』、女性には『婦人之友』や『婦女界』、『婦人倶楽部』、子どもたちには明治期の『少年世界』から『日本少年』、『少年少女譚海』等がある。

例えば一般的な話題として「健康」を取りあげたものであれば、『實業之日本』の特集として、三百を越す著名人を集めた「余が日常試みつゝある健康法」（一九二四年、二七巻七号）がある。「徒歩」を挙げた本多をはじめ、「安眠第一」の益田孝、「飯は二碗」の安田善三郎、「深呼吸」の武井守正、「間食廃止」の正宗白鳥、加藤玄智は「室内体操」、根本正はメソジスト派らしく「禁酒禁煙」、徳田秋聲は「散歩と冷水浴」、「楽しんで働く」、志賀泰山、「成行に任せる」小林一三らが寄せている。『文藝春秋』には新聞社が主催した「新八景」をテーマに菊池寛、石井柏亭らとの「名勝風景座談會」（一九二九年、八月号）が収録されている。

婦人向け雑誌では衣食住から恋愛、育児に夫婦生活等、よりドメスティックな話題が中心となる。例えば『婦人之友』の「家庭圓滿號」では「舅姑別居の可否得失」（一九一六年、一〇巻五号）なる特集が生まれ、「別居するを宜しとするは情けなき」という幸田露伴や岡田哲藏、

佐佐木信綱から、「別居必要」を説く新渡戸稲造や河上肇、「日々往復」可能な距離に住む志賀重昂、「同居も別居も場合による」という本多や徳田らが若夫婦の暮らし方について語った。同誌の「明日の女性に要求される一つの資格」（一九三一年、二五卷一号）という特集では、母・妻・娘として「夫々當面の仕事に忠實」であれという本多に、「生活力」を挙げた圓地文子、「健康と強き神經」の小泉信三、「自分の地位に目覚めること」を説く片山哲、「賢明」の吉野作造、猪熊弦一郎は「若々しい気持」、木村莊八は「純潔」、「社会意識」の平塚らいてう、「強健さ」の人見絹枝ら百十家がひとこと述べた。

また、ミュンヘン大学で取得した経済学博士の肩書きから本多には経済に関する記述も少なくないが、こうした一般向けの雑誌では殊に家計に関するアドバイスが寄せられた。同じく『婦人之友』には自由学園で行われた「家計問題の會」（一九二七年、二一巻一二号）の記録がある。羽仁もと子は勤儉貯蓄と土地取得の利点について、額こそ異なるものの本多と同意見であることを述べ、翌年にも同学園で「公私経済における無駄（WASTE）」（同、二二巻一二号）を主題にサロンが開かれた経緯がある。

もちろん本多個人としての寄稿も多く、明治から大正に係る過渡時代の生活問題を扱ったものから（同、一九一二年、六卷四号）、『婦人倶楽部』で「私の初戀」（一九三二年、一三卷五号）の淡く苦い思い出、戦後、晩年近くに家庭円満の秘訣と長寿法を綴った「幸福なる夫婦生活」（『婦人倶楽部』一九四九年、三〇巻一号）がみえる。

子どもたちには、政府の要請でシベリアや南洋諸島の各地を踏査した経験に基づいた冒険・探検談、あるいは教育者として植物の生態をわかりやすく教える「なぜ栗の實にあんな凄いいがある？」お山のお猿やリス君や食べられぬ様に」（『読売新聞』一九三六年、九月一三日）

等がある。

このように当時の新聞各紙に目を通して、専門の森林事業や公園事業に限らず他彼処で本多静六の名を見かける機会は少なくないし、次に述べる身上相談からもいえるように、本多は同時代の一般市民から頼りとされた存在であり、それだけ大衆社会で名の通った人物であったことがわかる。

翻って、現代社会においては初詣の参拝者数が全国第一位であるにも拘らず、その明治神宮を囲む社叢が今から百年ほど前に造られた森であることを知らぬ者は多い。況んやこの森をつくった本多静六の名前をや。幸いにして、一昨年前にNHKで明治神宮の森に関する特集番組が放映されたこともあって、本多の知名度もあがりつつある。戦後の社会から名前が隠れてしまった感のある本多静六ではあるが、彼の類いまれな功績は「百年の森づくり」という言葉の通り、何より原始の森と見紛うまでに生長したこの森がそれを証明していよう。

余談だが、東京大学の文化資源学研究室に在籍していた当時、修論のテーマを本多静六にしたいと相談すると、文学部の中には顔をしかめる先生もおられた。「へんちくりんなおじさん」と呼ばれる先生もおみえになった。一方、農学部の方には、本多先生は神様みたいな方ですよ、と敬っておられた。賛否両論のあるなかで、この受け捉え方の確たる差からも本多を再検討することの必要性を感じ、前途多難は目に見えていたが、あえて本多静六をテーマにしたのであった。

身上相談

さて、一般大衆と本多の接点といえば身上相談がある。本多が人生に関わる相談を引き受け

るようになったのは、一五歳から二三歳までの苦学時代、「強情な気性^{たち}」という自らの性格矯正のために恩師に勧められて天源淘宮術の大家に付いて観相学を身につけたところにある。二七歳の暮れからは身上鑑定所「南北館」を手伝い、三〇歳で某伯爵家の御家騒動を解決したことが契機となつて諸名家の家庭相談にあずかることになった。さらに六六歳の折、朝日新聞への投書をきっかけに三年ほど身上相談を受けたという（『人生と財産』）。

同紙の身上相談の回答には異議を唱へ自説を投じたこともある。「生まれた子が親に似ない」という相談に、過去の過ちを打ち明け勇気を出して清算せよ、と回答したM氏に対し、本多は、父母に似ない子は幾らもおる、夫婦の間の子であると断じて信ぜよ、然らばあなたもあなたの家庭も直ちに救われ悲劇を免れる、と答えた（一九三二年八月一五日付）。本多の前向きな回答は「苦蟲から恵比寿顔に」（『婦女界』一九三七年、五五卷六号）という笑顔の育みに象徴される。「百年の計」という森づくりの如く、長い目で人生を捉えよということであろう。

而して『實業之日本』には「身の上相談」コーナーが設けられ、悩める大衆が書面を通じて救いを求めた。「主家の閉店に遭つて途方に暮れる店員」から「両親のために無準備の結婚をすべきか」を悩む女性会社員、「人に嫌はれて悩みつゝある青年」には鏡に向かって自己の悪癖を叩き直した体験を伝えた。心身に関わる切実な悩みから、「新聞賣子になりたい」、「満洲行きの旅費」、「権威ある自動車学校」の教示を乞う実用的な相談もある。担当者の本多や穂積重遠、山室軍平らは懇切丁寧^に回答している。

「苦蟲から恵比寿顔に」 百年の名回答

本多の事績にみる方法論や回答が必ずしも当時の世間に肯定されたとはいえないが、後年、

次のようなことがあった。

足尾銅山鉱毒問題の調査委員の任にあった明治後期、本多は損害賠償金の殆どを被害地と無立木地の造林費に充てるよう当時の村民に主張した。地方民は一寸アテが外れて不満気だったが、洩々造林した。それから三〇余年、当時の総代と現村長らが突然本多邸を訪れた。ハテ、昔はよく田舎の総代がやってきたが近頃また何か始まったのかナ、と応じてみると、植林した森が立派に生長して多額の収入が上がるようになり、村は大変豊かになりました、とのことであった。

本多は昔別れた子どもの成長を知らされたような喜びを味わい、こうした喜びに接するのも「山林といふ生命の長い仕事に関係すればこそ」と自伝に記している。これこそ「苦蟲から恵比寿顔」を生み出した名回答といえよう。

むすび

本多の百年の森づくりの教訓は、このように一般市民の悩みの解決にも活かされていた。百年近い時を経た明治神宮の森も、今ようやくその意義が認められる時期に来たといえるのではないだろうか。私の拙い本も微力ながら少しでもそのお役に立てればと思う。最後に、本多健一先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員)

国際日本文化研究センター共同研究員)